

平成二十四年度「全日本中学生水の作文コンクール愛媛大会」

最優秀賞

水について

西条市立東予東中学校 二年 石野 葉月

無人島で生活したことがある人は、なかなかいないと思う。私は、中学一年の夏休みに沖縄の無人島で見ず知らずの仲間達と四日間生活を共にした。トイレもお風呂も水道も…何もない島で過ごした四日間は、私に水の尊さを痛感させてくれた。

米や味噌、調味料など最小限の食料とポリタンク数個の水は、近くの島から持ってきてくれた。それ以外の食料は、豊かな自然から分けてもらう。だが、九人分の水が九十二リットルだ。炊飯などの調理に二十リットル使うと七十二リットルしか残らない。これを九人で分けると一人あたり八リットル。一日分にするると一人二リットル。二リットルあれば大丈夫だと思うかもしれないが、真夏の強い日射しの中で食料調達や寝場所作り、調理や後片付けもある。普段の生活とは比べものにならない運動量だ。そして、水は水でも蛇口をひねれば勢いよく出てくる冷たい水ではない。長時間ポリタンクの中で日射しにさらされた生温かい水だ。それでも、誰も文句は言わない。私は、その事に驚くと同時にこれまで自分がどれだけ水のありがたみに気が付かずに生活してきたか思い知らされた。

今までは、蛇口をひねれば水が出るのが当然でいちいち感謝などしてこなかった。だが、無人島では、いつもの当然と思っている日常が一転する。水を飲むことも簡単に出来ない。温かい湯船のお風呂もない。ましてや水洗トイレなど夢のまた夢で地面に穴を掘って作った仮設トイレだ。寝場所も砂の上にブルーシートを敷いて、雨を防ぐため

にブルーシートで天井と回りを簡単に囲っただけのものだ。

また、食事も火起こしから始める。普段は母が作ってくれているが、何もかも自分達でしなくてはならない。その中で、私達の生活に水がいかに密接に関わっているか、それがいかに大切で限りあるものか身に染みた。だが、こつとした普段の生活とかけ離れた環境の中だからこそ、水という資源を大切に扱えたのだと思う。

しかし、皮肉なことに人の命を奪うのもまた水だということが、三月十一日の大震災で判った。東日本大震災で水死した人は一万二千四十三人にもなる。これは、死者数全体の九割強の数字に値する。この時の津波の高さは最高で二十一メートルにもなったそうだ。これは、自然の私たち人間に対する警鐘ではないかと思う。

私達は水を無駄使いすることが日常的になっている。例えば、歯磨きや洗顔のとき水を出し放してはいないだろうか。入浴時のシャワーはどうだろうか。私は、このような身近なことで節水することが、私達の世代の使命だと思う。

水は、私達人間を含め全ての生物の命の源。地球上に住む生き物は水がなければ生きられないのに発展した国の人々は、『水は使えてあたりまえ。』と知っている人が大多数だと思う。このような中で水のありがたさ、大切さを広めるためには、私達の意識の改革が必須だと思う。

私は、世界中の人々が水を敬い日々水に感謝して生きていけば、長い道のりの末に水飢饉も無くしていけると信じている。節水は未来の地球に住む私達人間のためでもあるのだから。これから私は、周りの人や家族に水の尊さ大切さを広めていきたいと思う。